2024年9月15日（日）主日朝礼拝説教

『私はその方を知っている』　井上隆晶牧師
使徒言行録22章6～16節、ヨハネによる福音書7章2～9、28～29節

❶【仮庵祭～降誕祭へ】
イエス様のガリラヤでの伝道の初期は順調であり、主が行く所はどこでも多くの人が集まり、すすんでその弟子となる者もたくさんいました。ことに5000人の給食の時には、イエス様の人気は最高潮に達し、群衆は彼を王様にしようとしたほどでした。しかしこのような人気が肉の欲（病気の癒し、食物の満たし）から出ていることを主は良く知っておられました。キリストが神であり、真理であるから従おうという人は少なかったのです。この6章を境として、主は受難の道を歩むことになります。7章の初めに「**ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた**」(2節）とあります。「**仮庵祭**」というのは荒野での40年間のテント生活を記憶する祭でした。ただ辛かった生活を記憶するだけではなく、40年間荒野を旅したけれども、神が高い天にいるのではなく地に降り、契約の箱の姿をもってイスラエルと一緒に旅をされ、彼らを苦難から守って下さったことを記憶する祭りでした。10月頃祝われ、8日間続きます。この祭の間中、毎日シロアムの池から水を汲んでは神殿に運び、朝夕の供え物と共に祭壇に注がれたそうです。この「**仮庵祭**」は今、キリスト教徒にとっては「**降誕祭**」として祝われるようになりました。2000年前に神が肉体を取って（仮の宿)、地上にお住まいになったことを記憶すると共に、神の子キリストが世の終わりまで「教会」という姿で私たちの旅に同行し、共にいてくださることを記憶するのです。だから、神は天におられるだけでなく、この地上に、ここにおられ、私たちと一緒に旅をしておられると思わなければなりません。人間、ひとりぼっちというのは一番辛いものです。私はずっと孤独でしたし、今でも孤独を感じる時があります。でも罪人を決して見捨てない方が一緒なら、その旅の辛さも乗り越えることができるように思います。

❷【信仰は神から与えられるものである】
3～4節を見ると、イエス様の兄弟たちがイエス様に「**ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。**」と言ったことが書かれています。あなたのしている奇跡を都会の弟子たちに見せれば、皆が信じるようになると兄弟たちは薦めたのです。しかしユダヤ人たちはいくら奇跡を見ても、最後にはイエス様を見捨てました。人は奇跡を体験したら信仰を持つ訳ではないのです。カルトから脱会する奇跡を体験しても、病気が癒されるという奇跡を体験しても、９割の人は教会に来ません。キリスト教信仰は人間の中から出るのではなく、上から一方的に与えられるものです。パウロは「**あながたは恵みにより、信仰によって救われまし**

た。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」（エフェソ２：8）と言っています。また洗礼者ヨハネは「**人は天から与えられなければ、何ものも受けることは出来ない**」（ヨハネ３：27）と言っています。昨日までキリスト教を迫害していた者でも、今日聖霊を受けるならば、突然変わり、主と告白する者となるのです。パウロがそのことを身をもって証しています。それは人間の成長論からは考えられないことです。信仰はいつ与えられ、いつ聖霊が下るか分かりません。それだけにキリスト教は面白いし、希望があるのです。

❸【メシアの秘密】

イエス様は大きな奇跡をいくつも行われましたが、人里離れた場所か、隠れた所で密かに行いました。しかも奇跡の後には「誰にも言わないように」と厳しく命じています。それを「**メシアの秘密**」と言います。この世をひっくり返す革命家のようなことも、平和運動もなさいませんでした。もっと社会の悪に対して、国家の悪に対して公然と立ち向かってゆく英雄のような姿であって欲しいと思ってもそうなさいませんでした。いつも主は一人ひとりの病人に手を置き、貧しい者と語り、身分の低い者と交わり、彼らの話をじっくりと聞き、実に地味なのです。そこに弟子たちも、兄弟たちもまどろっこしさを感じたのです。だから兄弟たちは「**こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい**」（4節）と言ったのです。イエス様は、時が来るまでは隠れておられます。

●私は1990年に都島伝道所に赴任し、1997年まで7年間、今の礼拝堂のスタイルにすることについて「神様、私はどうしたらいいのですか。私は正しいでしょうか。教えてください。しるしを与えてください。」と祈り続けてきました。そして7年目に吹っ切れるように改装しましたが、教区にはなるべく知られないように隠れて活動をしてきました。やがて様々な集会に参加するようになり、自然に広まってしまい、コロナによる動画配信で全国にまで知られてしまいました。すると、「説教は良いのに、あの礼拝さえなければ」と言われたり、他のキリスト教教派からは「偶像崇拝」、「偽物」、「変人」と言われました。でも自分では必要だと思ってしているのですが、今でも「神様の御心を教えてください」と祈り続けています。そして主のお許しがなければ、これからも何も実現できないだろうと思っています。

❹【父なる神の意志を求めて生きる】

兄弟たちに「**自分を世にはっきり示しなさい。**」と言われても、イエス様は「**わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。…わたしはこの祭には上っていかない。また、わたしの時が来ていないからだ。**」（6節、8節）と言われ、上京することを拒否されました。イエス様は「神の時」ということをとても大事にされました。イエス様の行動の基準はいつも「**父なる神様の意志**」でした。神の御旨というものを第一にしたのです。いくら大勢の人たちが賛同しても、身内に薦められても、神からの言葉がなければ一切動かないのが

イエス様でした。それはちょうど、イスラエルが荒野を旅していた時に、雲の柱、火の柱が動かなければいつまでも旅立たなかったのと同じです。人間が考えていることと、イエス様が考えていることには天と地の隔たりがあります。

パウロはローマ総督フェリクスにキリスト教信仰について話しました。「**パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐ろしくなり、今回はこれで帰ってよろしい。…と言った。**」（使徒 24：25）とあります。正義とはキリストのことであり、節制とはクリスチャン生活であり、来るべき裁きとは未来のことです。榎本保郎牧師は「この三つのものが私たちキリスト教信仰の代表的なものであると思う。今日の私たちの信仰において、未来の審判という事が、あまりにも無視されているのではあるまいか。キリスト教が現世の今のこの時だけのもののように説かれている傾向があると思う。」と言っています。

●2 世紀のテルトゥリアヌスはアフリカのカルタゴでローマの百人隊長の子として生まれ、法律、弁証、ギリシャ語古典などの教育を受けローマに出て、法律家として有名になりました。194 年、ローマの円形競技場でキリスト教徒たちが迫害され、十字架、火あぶり、猛獣の餌食にされるなどの処刑にあい、殉教の死を遂げるのを目撃し、彼らの姿にとても心が打たれました。彼はその後、回心してクリスチャンになり、キリスト教護教論を書き、その時の体験を書いています。「この驚くべき忍耐を目撃したものは誰でも、ある不安に襲われる。何が彼らにこの忍耐を与えたかを詮索せずにはおられなくなり、その真理を発見すると、すぐにも自らもこれに従うのである。…この真理を知ったからこそ、彼らは故郷の家に帰るように死につくことができるのである。」

テルトゥリアヌスは殉教者を見た時「不安に襲われた」といいます。総督フェリクスは神の言葉を聞いた時「恐ろしく」なりました。イエス様が生まれた時も、ヘロデ王もエルサレムの人々も「不安を抱き」（マタイ 2：3）ました。**イエス様をお迎えするということは、私たちの人生に不安を呼び起こすことなのです。それは舞台の主役を、私からイエス様に譲ることだからです。その不安に対して、二通りの生き方がありました。一つは不安を抹殺しようとする生き方で、代表がヘロデ王です。もう一つは不安の中に生きる生き方で、代表がマリアや弟子たちです。**不安があってもいいのです。不安を持ちながら、神と交わり続けるのです。**人間の中からは神に従う力は出てきません。従う力は神から来ます。聖霊の力を受けなければ神に従うことは出来ないのです。**殉教者たちの生涯を読むと、皆、悩みながら、不安を持ちながら、主と交わる中でだんだんと透明になり、やがて従ってゆく者へと主が変えて下さるのです。だからひたすら主に祈り、交わり続け、従う力を求めてゆきましょう。